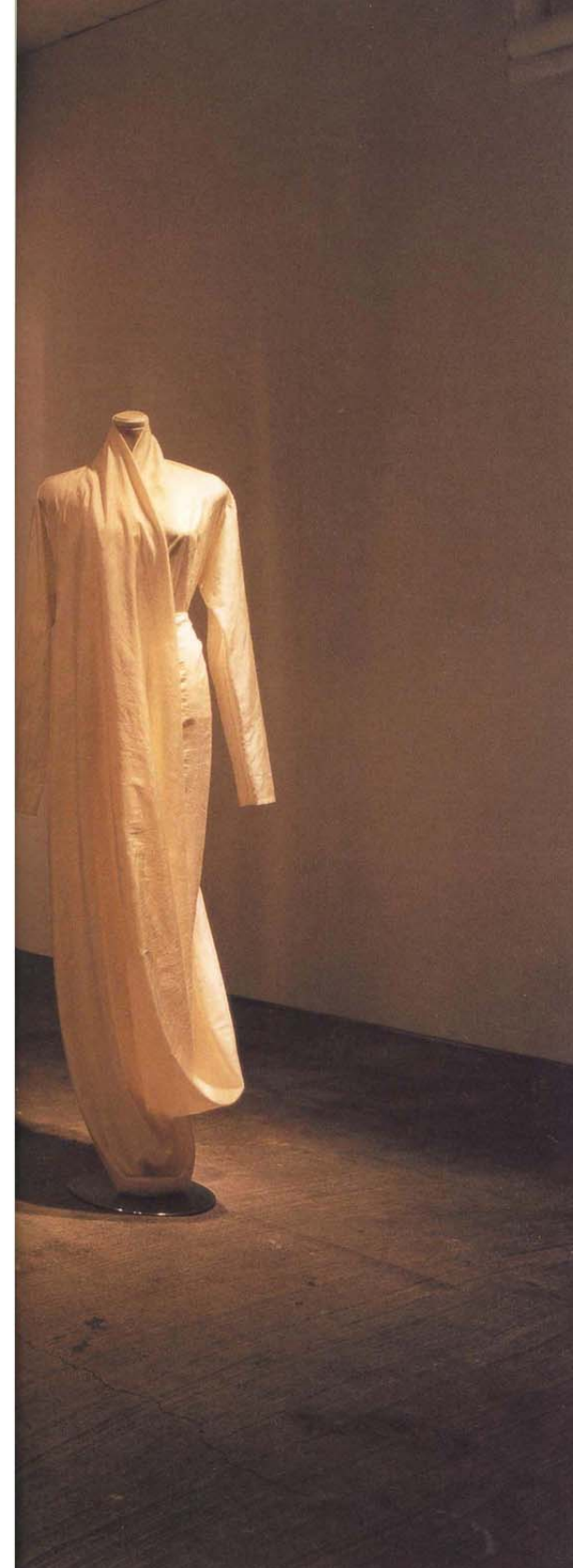




年月を経た家には、その場独特の「気」が満ちている。
それは、物理的には測れないけれど、たしかに感じられ、
ひとの気持ちに作用してエネルギーやインスピレーションに変換される。
東京・弁天町の一角にある、
明治末に建てられ、三代にわたる芸術家によって育まれてきた家。
ここでこの5月、「白の領域」と題した
秦泉寺由子と真砂三千代の展覧会が開かれた。
作品は、場所との邂逅によって生み出され、
場所は、その作品によって新たな息吹を吹き込まれた。



「白の領域」展会場。秦泉寺の布を真砂が仕立てた衣が並んだ。
青竹は、岩田邸の裏の竹林から伐ったもの。

女神が舞い降りた場所

素材とカタチと場のコラボレーション「白の領域」
東京・弁天町 ギャラリー・ギブリ

撮影 佐藤正治

余白の衣、 竹染の響き。

文 堀口博子

昼間でも薄暗い露地を抜け、
地下へと続く石段を降りると、
そこは光の世界だった。
竹染の白を纏ったボディが、
まるで女神たちの降臨を思わせるように
静かに佇んでいた。

今年五月、東京新宿の弁天町、幽霊
坂上にあるギャラリー・ギブリーで催さ
れた『白の領域』は、竹染の白絹で仕
立てられた十体のローブ展であった。

キルト作家・秦泉寺由子と衣作家・
真砂三千代によるこのコラボレーショ
ンは、天然素材、天然染料に本質的な
美しさを求めてきたふたりの作家が互
いの領域を手渡すことによって、どち
らの作品でもない、誰のものでもない
創造の領域を産み出した。

庭の竹林が風にそよぐ新緑の頃、鬱
蒼とした樹木が旧家をいたわるように
建物覆う。近隣は既にマンション化
が進み、幽霊坂のその名にふさわしい
情緒はもはや失せてしまったかのよう
だが、この屋敷内だけは時間が止まっ
たまま間もなく一世紀を迎えようとし
ている。周囲のコンクリートやアスフ
ルトで塞がれた都市環境ではとうて
い棲息できなくなった物の怪たちは、
僅かに残されたこの敷地内に居場所を
求めて集まるのだろうか。

木戸門をくぐった瞬間、しつとりと
した気配がやって来る。木々の葉に遮
られ光の届かない露地を抜け、母家に
沿うようにして造られた石の階段を体
を屈めながらゆつくり降りる。昼間て
も薄暗いこの不確かな建物への侵入は、

どこか儀式めいた趣があり、心はやる。
階段を降り切る頃には暗さにも慣れ
てくる。と同時に、目の前にまばゆい
光の世界が広がる。真白い展示空間に
設えた竹の庭に十体のローブが、
まさに女神が舞い降りてきたように静
かに、密やかに佇んでいるのである。
女神の庭の中央では竹染の透きとお
るような薄絹が天上から落され、背景
に漂う音の風景とともにふわふわと風
に舞う。侵入者である観客はその庭を、
時に方向を変えながら幾度も巡り、此
処に居合わせたことの不思議に浸る。

昨年十二月に始まった私自身の『白
の領域』との関りは、図録制作などの
お手伝いをしながら真砂さん（以後敬
称略）の傍らで竹染のことを考える毎
日となった。そしてそれは、実際に竹
染を見せていただくために、この夏バ
リ島の秦泉寺さん（以後敬称略）の仕事
場を訪れる旅へとつながっていった。

秦泉寺由子の白は、バリのアトリエ
に自生する、熱帯のみずみずしい青竹
が写した天然の白である。
早朝、竹を刈り取る。伐採するたび
に水が四方に飛び散る。節と節の空間
に水を蓄えているのだ。竹は水管その
もので、地下水を上へと高く運び、

伸びてゆく植物であることをこの時、
真つ青に抜けるバリの空を見上げなが
ら実感した。

この生命力が竹染の神秘。秦泉寺は
そう確信している。天然の白を染める
という秦泉寺の探求の眼差しは、漆作
家、角偉三郎氏の作品に出会い、閃い
た。何層にも塗り重ねられながら色に
深みと力強さを増していく角氏の漆を、
染色で実現できないだろうかと思いつ
つたのが白に白を染める、天然の白を
染めるという命題だったのである。

物の本にも出ていない白を染める植
物を探す日々が、かくして始まる。し
かし、自分がイメージする白を染める
ような植物はいっこうに見つからない。
そんなある日、満月の夜だった。アト
リエの竹の葉先からいくつもの水滴が
したたるのを見た。「もしかしたら竹
なら・・・かぐや姫伝説が頭をよぎ
った」と言う。

青竹を細く裂き、二時間ほど煮出す。
手早く濾過した染液に布を浸し、一
気に染め上げる。染液がすぐクタク
タになってしまいう竹染は鮮度との闘い、
少しも気を抜くことはできない。染め
の段階では布は茶色に染まっているだ
けなのだが、「染めと同じぐらい魂を
込めて」水洗いを丹念に繰り返すこと



Horiguchi Hiroko ; 現象空間編集者 コンテンツデザイナー

出来事【phenomenon】の表象と構造に潜む呪術的機能をテーマにフィールドワークを重ねている。

によって「竹染の白」へと変貌する。それはもとの生地色にはない、絹地によつては大理石のような奥行きを持つどつしりとした白だ。

染め上がったばかりの布を太陽にさらす。強い日差しが見る間に布を乾かしていく。風を気持ち良くはらんだ布に見惚れていたなら、信じられないことだが虹色の輝きがはつきりと写し出された。ピンクがかった、時に緑がかった光彩が風にゆれる布のドレープに沿ってモアレのように浮かび上がる。

しかしそれはほんの一瞬見えたか見えなにかの微細な現象だ。この表情を秦泉寺は、「光合成が染めた色」あるいは「竹の精霊の色」と喩える。

「私は染色の専門家ではない。ただ植物の神秘に魅せられて、それを識りたい、生命の神秘を解き明かしたいだけでここまで来てしまった」

秦泉寺はかつて、「布はメディアである」と語るテキスタイルデザイナー、新井淳一氏に触発され、氏のハイテク素材を使ったキルト製作に打ち込んでいた。そして、ミシン・ステッチを駆使したキルトの世界を確立する。そこへ至った後に、染めへ、糸へと廻り、布そのものも自らつくり出すことになっていったのである。それは、自然への畏敬の念を深めてゆく道筋であった。バリ島にクリエイションの場所「グラス・ハウス」を十年前に造つたのは、その仕事に没頭するためだ。京都の自宅で思索し、バリではひたすら身体を使って検証する。そして再び京都で作品を仕上げる。こうした過程を経て完成する秦泉寺のキルトは、他の追従を許さない。美しい力“を秘めている。朱を染めるにも、藍を染めるにも秦泉寺の染めはまず竹染から始まる。そう

することでの色もより艶やかに仕上げることを発見した。

竹染が抽出する白の美しさを秦泉寺は「余白」と言う。それは探し求めている光の領域としての白の存在だった。

竹染のロープを纏ったボディが彫刻のように立ち上がる。そこには、布として観賞するのは全く異なるリアルが迫る。ドレープをたつぷりと湛えたロープは、真砂三千代の手によって注意深く組み立てられている。

これまでさまざまな個性の布作家とコラボレーションを重ねてきた真砂だが、竹染との出会いにこれまで体験したことがないような衝撃を覚えた、と話す。94年東京の玉川高島屋で開催された『現代の道具展』でのことだった。さまざまな手工芸が並ぶ展示空間の中で竹染はひととき軽やかだった。手仕事であるにもかかわらず、人の手の痕跡を感じさせない、人の思いの重さを抜いたその仕事に洗練を見た。その輝きをどうデザインするか。答えはすぐに浮かんだ。光の襷。それがゆらゆらと揺らいているヴィジョンだ。

できる限り鉄を入れず、竹染が布に吹き込んだ気の流れをそのまま一着のロープとして仕立てる。ボタンもジッパーもない。結ぶ、たたむ、重ねる、垂らす、ひねるなどの手法で、フォルムは着付けによって完成するという衣である。結び目がほどこたらカタチは成さない、その時にしか現れない即興の衣なのである。この危うさと同時に迫る圧倒的な量感の落ち着きは一体どこから来るのだろうか。

一ミリの中で理想の形を探っていたオートクチュールの世界に疑問を抱き、布一枚を着るアジアの衣文化に魅了され、着物の伝統に日本の服飾のオリジナルを視つめる真砂は、その天然の着心地を自社ブランド「アフア」で提案し続けてきた。その真砂にとって、この原初的手法だけでロープを仕立てるというダイナミックな試みは、長い間あたためてきた夢の実現でもあった。秦泉寺とのコラボレーションが決まった時、場所はギブリしかない、と直感したと言う。

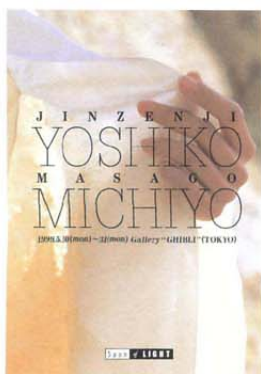
「売るためではない、ファッションではないとしたら何を見せればいいのか、すごく緊張した。この空間が見えたからあのカタチは生まれたと思う」

闇から光へと巧みに演出されたひと続きの絵巻物の内へと誘うことができないギブリなら、限りある状況の中で作品を見せるための最高の演出ができるのではないかと、考えたのだ。

傷みの進むこの建物を残すためには大きな経済的援助が必要だと聞く。保存建築として指定が受けられることを家主である岩田家は望んでおられるが、果たしてあと何回ここで企画展を行えるかは分からないと言う。

この空間は最後の時を生きているのだろうか。そんな感慨を抱きながら行われた今回の展覧会は、場所に宿る魂の在り処を竹染のロープがメディアとなつて表出させ、そのエネルギーを享受するための二十二日間でもあったのではないだろうか。

神楽奉納の巫女の舞いと柱のように、場と作品が時空一体となつて結び合い、引き合った時、やがてそこにはもうひとつの磁場が生まれる。作品は場によって完成し、場は作品を通して蘇る。『白の領域』は我々をそこへと導いてくれたマジカルな場の体験であった。



『白の領域』展の図録を、抽選で20名にさしあげます。
ご希望の方は、ハガキに住所、氏名、年齢、職業をお書き添えの上、以下の住所までお送りください。1999年12月31日必着。
[宛先] 〒106-0031 東京都港区西麻布2-7-15 白の領域事務局 [図録] 係